

# 八 森 遺 跡

第6次発掘調査報告書

1982

山 形 県  
山 形 県 教 育 委 員 会

はち もり  
八 森 遺 跡

第 6 次 発 掘 調 査 報 告 書

昭 和 57 年 3 月

山 形 県

山形県教育委員会

# 序

北に出羽富士「鳥海山」を望み、肥沃な庄内平野を舞台とする酒田市東部の水田地帯は、古くから各時代の遺跡に恵まれ、豊かな自然環境とともに、価値ある歴史環境をかたちづくってきました。

国指定の史跡として、古代出羽国の国府に擬定されている「城輪柵跡」、また古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」は、最近の発掘調査によって明らかにされている所産であります。

このような貴重な先人の文化遺産を保護し活用するとともに未来に伝えることは、現代に生きる私どもの責務と申せましょう。近年、「地方の時代」、「文化の時代」と言われる中で、文化財が県政の上で重要な位置を占めるようになったのも意義あります。

このたび、庄内総合パイロット事業に関連して、八森・豊原B・安田の三つの遺跡の緊急発掘調査を実施して、埋蔵文化財の記録に努めることになりました。

本報告書は、八森遺跡の第6次発掘調査の成果をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、さらには学問研究に役立つことを切に願う次第であります。

最後に昭和52年以来、八森遺跡の調査と保存に御助力をいただいた八幡町教育委員会並びに関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和57年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

## 例　　言

1. 本書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受け昭和56年度に実施した、農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）に係わる八森遺跡の第6次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和56年4月6日から同年5月1日までの延19日間である。
3. 調査にあたっては、八幡町教育委員会並びに山形県庄内支庁経済部、最上川右岸土地改良事務所などの諸関係機関の協力を得た。
4. 調査体制は下記の通りである。

調査主体	山形県教育委員会
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者	主任調査員 佐藤庄一（教育庁庄内教育事務所埋蔵文化財調査係長） 現場主任 野尻侃（教育庁庄内教育事務所技師） 調査員 安部実（教育庁庄内教育事務所技師） 佐藤正俊（教育庁文化課技師） 渋谷孝雄（教育庁文化課技師） 名和達朗（教育庁文化課技師）
事務局	庄内事務所長 小嶋茂太（教育庁庄内教育事務所長） 所長補佐（総括担当） 藤塚真一（教育庁庄内教育事務所次長） 所長補佐（庶務担当） 大須賀芳夫（教育庁庄内教育事務所総務課長） 所長補佐（業務担当） 村岡敏（教育庁庄内教育事務所社会教育課長） 事務局員 菅原猛（教育庁庄内教育事務所総務主査）

5. 本報告書の作成は、野尻侃が執筆・編集を担当した。写真撮影については安部実が協力し、全体を佐藤庄一が総括した。実測図等、挿図の作成にあたっては石井節・加藤ひとみの協力を得た。
6. 挿図縮尺の遺構は1/60、遺物実測図は1/3を基本とし、それぞれにスケールを示した。本文・挿図中の記号は、SB—建物跡、SK—土壙、EB—建物を構成する柱穴の記号である。遺構番号は、建物跡については第1次～第5次まで呼称された番号の続き番号を使用し、土壙などについては今回の調査で新しく21番から一連番号を付した。

# 目 次

I 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
II 遺跡の概観	
1. 立地と環境	3
2. 層序	4
III 造構と遺物	
1. 造構 SB 7建物跡	7
SB 8建物跡	8
土壤	9
2. 遺物 土器	11
瓦・石器	12
M 結語	15

## 挿図目次

第1図 八森遺跡と周辺の古代遺跡	2
第2図 遺跡層序図	4
第3図 遺跡全体図	5
第4図 造構全体図	6
第5図 SB 7掘立柱建物跡	8
第6図 土坡実測図	10
第7図 出土遺物(1)	13
第8図 出土遺物(2)	14
付表1 八森遺跡と周辺の古代遺跡	3

## 図版目次

図版1 遺跡遠景(南西より)	
南西区近景(東より)	
北東区SB 7掘立柱建物跡(南より)	
図版2 SB 7掘立柱建物跡	
図版3 SK 40・41・43・44・45土壤	
図版4 出土遺物	

# I 調査の経緯

## 1. 調査に至る経過

八森遺跡は、山形県鶴岡市八幡町市条字八森に所在する。明治初期に松森胤保がその著書「弄石餘談」で庄内の鐵石産地を30ヶ所あげているが、その中に「山上に古土器の破片あり」との記事があり、この山上が八森山と考えられる。八森山には昭和53年発刊の山形県遺跡地図によれば、八森A・B・Cの3遺跡が登録記載されており、今回の調査地点は八森B遺跡とされているものにあたる。昭和52年からこの地域一帯が農村基盤総合整備パイロット事業(庄内地区)の八森自然公園構想予定地に含まれることになり、八幡町教育委員会によって現在まで5次の発掘調査が行われている。第1・2次は八森B遺跡東半部の礎石建物群を調査し(文献4)、第3~5次は西半および中央部の遺構を調査したものである。

今回の第6次調査は、遺跡西半および中央部の未調査地区を補足的に確認することを目的としたもので、八森B遺跡発掘調査の最終年次になる。調査は山形県教育委員会が主体となり、庄内教育事務所が実施にあたった。調査期日は、昭和56年4月6日から同5月1日までの延19日間である。

## 2. 調査の経過

調査はグリッド設定作業から始めた。グリッドは昭和52年度に実施された第1・2次調査の基本枠をそのまま踏襲した。設定の基準は、遺跡の中央部北端にある三角点を基点とし、真北方向をX軸(北→南)、真東方向をY軸(西→東)としている。また30m毎をアルファベット順で区分し、さらにその内を3m単位のグリッドに細分している。

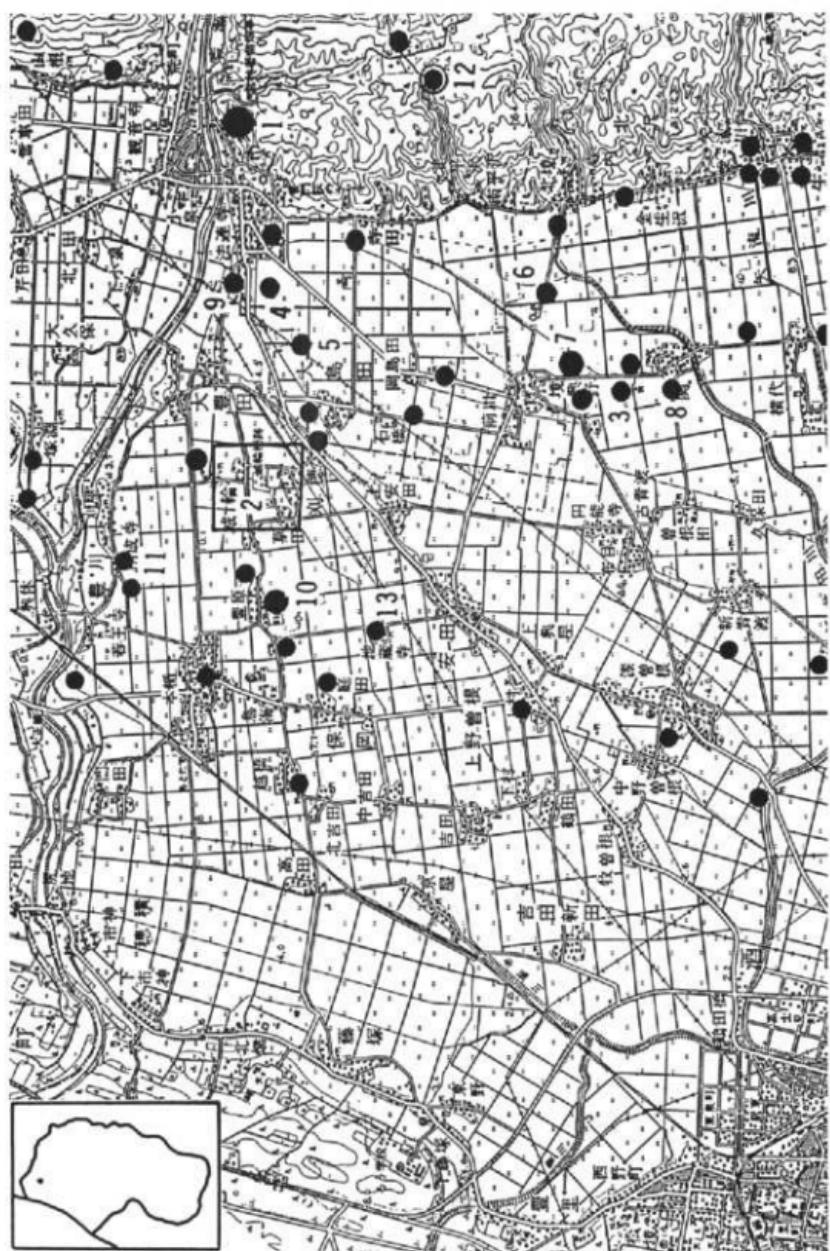
今回の調査対象地区は、八森B遺跡の南半および中央部にあたり、野球場の建設が計画されている所である。初めにトレチナ掘りによって遺構の分布状況を確認した。この結果、遺構・遺物の分布地域が野球場計画地域の北東部と南西部にあることがわかったため、この両地区を精査区域として重機械による表土剥ぎを行った。

北東部では掘立柱建物跡や土壤など多くの遺構が密集して発見されており、調査の大半はこの地区を集中的に行っている。北東部では縄文時代前期の土壤も1基発見されている。調査の終盤は南西部の精査にあたった。この地区では整地地業の痕跡が認められたため、建物跡等の存在も考えられたが、戦時中の抜根の痕が著しく、柱穴と思われるピットを2ヶ所検出しただけに留まった。遺物としては、旧石器時代のフレイクおよび瓦片等がある。

なお調査の期間中、5月1日に地元の方々に対する現地説明会を実施し、雨天にもかかわらず30名の参加を得た。

酒 田

1:50,000  
1000 m  
2000  
3000



第1図 八森遺跡と周辺の古代遺跡

## II 遺跡の概観

### 1. 立地と環境（第1図）

山形県の内陸部を南北に貫流する最上川は新庄市本合海で西に向を変え、出羽山地を貫き庄内地方に広大な沖積平野を形成する。八森遺跡は最上川によって二分された北部出羽山地の西端に位置し、西流する荒瀬川が形成した河岸段丘上に存在する。八森にはA・B・Cの3つの遺跡があり、A・C遺跡は低位の段丘面に、B遺跡は中位段丘面に立地する。今回の調査地は八森B遺跡にあたる。遺跡は標高60m～65m、東西に長く形成された河岸段丘上にあり、北西部は急傾斜し平野部を見おろす。北東方には鳥海山がそびえたち、周囲の景観を一望出来るところである。平野部には、古代出羽国府と擬定される城輪柵跡や、篠地業の建築部材が発見された堂の前遺跡をはじめ、平安時代の遺跡が数多く分布している（第1図・表1）。八森遺跡は城輪柵跡の内郭より真東3kmの地点にあり、市条部落を南北に二分する中央通りは城輪柵跡の東西中軸線上にあって、市条八幡神社の正面に当る。市条は一条とも読みとれ、城輪柵跡を中心とした条里制の基点としての可能性をもつ。平野部に点在している平安時代の遺跡は、条里跡を基盤としながら律令体制下で計画的に配置された役所や村落と考えられる。

表1 八森遺跡と周辺の古代遺跡（第1図参照）

（山形県遺跡地図・昭和53年刊）

遺跡名	遺跡番号	種別	立地（標高）	時期	所在地	備考
1 八森遺跡	2274	集落跡	山地（167m）	平安	飽海郡八幡町大字市条字八森13	八森遺跡第1・2次調査報告書 1970年
2 城輪柵跡	2016	官衙跡	水田（10m）	平安	酒田市大字城輪・大豊田・刈畠	昭和24年から根岸開拓 現在 酒田市歴史が原記念館
3 北田遺跡	2020	集落跡	水田（9m）	平安	酒田市大字間字北田6	昭和55・56年 鳥取委調査
4 堂の前遺跡	2269	集落跡	水田（15m）	平安	飽海郡八幡町大字堂の前字堂の前23	昭和48～51年 準教委調査 山形県埋蔵文化財調査報告書第5・7・10・30号
5 後田遺跡	2268	集落跡	水田（15m）	平安	飽海郡八幡町大字政所字後田17	昭和52年発掘
6 上ノ田遺跡	新規	集落跡	水田（11m）	平安	酒田市大字境奥野字上ノ田	昭和53年発見 山形県埋蔵文化財調査報告書第52集
7 城興野遺跡	2017	集落跡	水田（10m）	平安	酒田市大字境奥野字家の東	昭和55年 準教委調査 山形県埋蔵文化財調査報告書第46集
8 開B遺跡	2019	集落跡	水田（10m）	平安	酒田市大字開	昭和54年 準教委調査 山形県埋蔵文化財調査報告書第57集
9 茅針谷地遺跡	2270	集落跡	水田（15m）	平安	飽海郡八幡町大字法蓮寺字茅針谷地26～27	昭和55年 準教委調査 山形県埋蔵文化財調査報告書第45集
10 豊原B遺跡	新規	集落跡	水田（10m）	平安	酒田市大字豊原字裏向2ほか	昭和60年 準教委調査 山形県埋蔵文化財調査報告書第55集
11 明成寺遺跡	2015	集落跡	水田（10m）	平安	酒田市大字豊川字明成寺	松原祐士「酒田市明成寺遺跡」 庄内考古学第11号 1972年
12 盛沢窯跡	2262	古窯跡	山地（140m）	平安～鎌倉	飽海郡八幡町大字北平沢字盛沢	
13 安田遺跡	2006	集落跡	水田（9m）	平安	酒田市大字安田字芳岡31	昭和56年 準教委調査

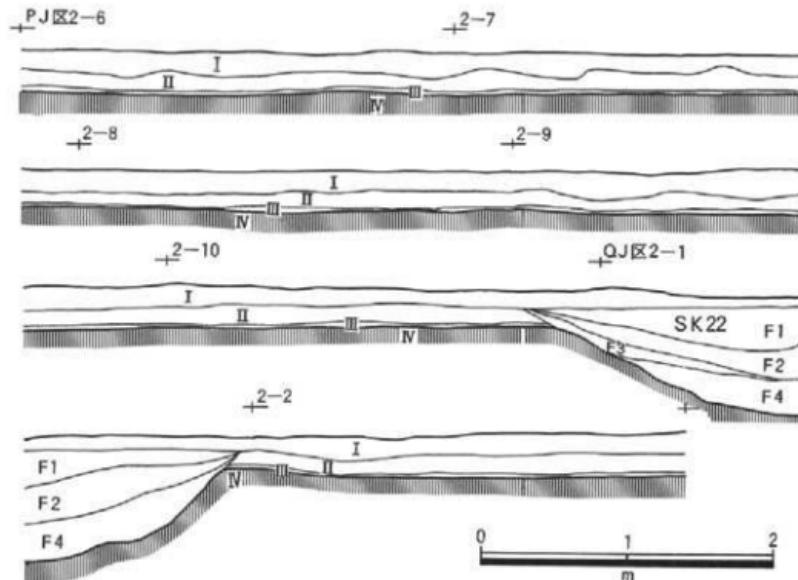
## 2. 層序（第2図）

本遺跡は八森山の中腹にあり、西南部が高く、北東に向って緩やかな傾斜をもつ。第1・2次調査が行われた遺跡の東半部は傾斜が弱く、ほぼ平坦地となっている。今回の調査区と台地西南端との比高差は約4m、北東端との比高差は約3mを測る。表層の地質は、北東部が荒瀬川の中位河岸段丘にあたり砂や礫などの段丘堆積層、南西部が安山岩を多量に含む矢流川浮石質集塊岩層で上層に砂質凝灰岩も混じっている。発掘区中央東西トレント北壁の東西セクションとともに、遺跡の基本的な層序を次に述べる。

- 第Ⅰ層 茶褐色微砂（厚さ10~20cmの耕作土）
- 第Ⅱ層 暗褐色粘質土（遺物包含層。地点によって凹凸があり、本図は比較的厚い部分）
- 第Ⅲ層 明褐色粘質土（黄褐色粘土を多量に含む第Ⅳ層への漸移層。遺構検出面）
- 第Ⅳ層 黄褐色粘土（無遺物層。西南部では灰褐色砂質凝灰岩粒が混じる）

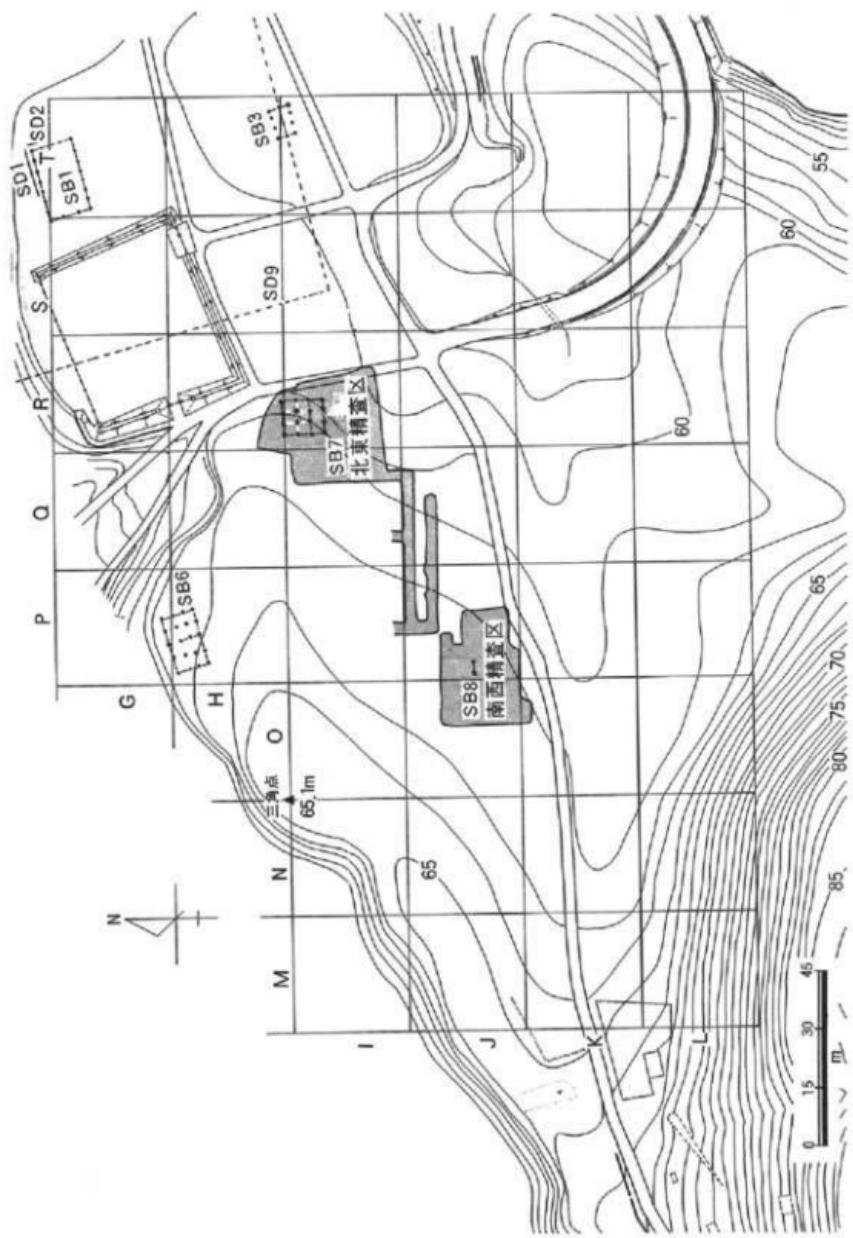
SK22土壤覆土……第Ⅱ層から掘り込まれている近世の土壤

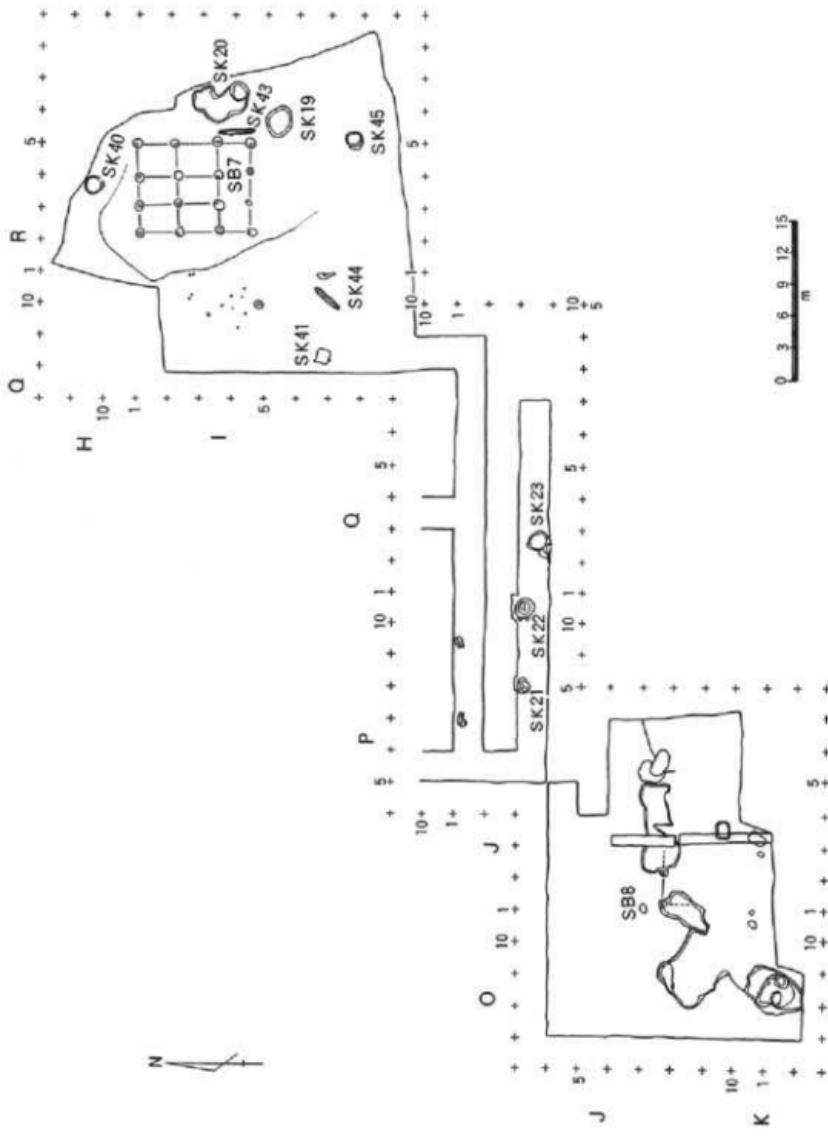
- F1 暗褐色粘質土（黄褐色粘土ブロックを少量含む）
- F2 茶褐色粘質土（黄褐色粘土ブロックを多量に含む）
- F3 黄褐色粘土ブロック
- F4 明褐色粘質土



第2図 遺跡層序図

第3図 遺跡全体図 ( $S = 1/1500$ )





第4図 遺構全体図

### III 遺構と遺物

#### 1. 遺構

今次の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、土壙8基の10例である。このほか柱穴と思われるものがあったが、組み合わさるまでには至らなかった。検出層位は掘立柱建物跡とSK41土壙が第II層暗褐色粘質土層下部、または第III層明褐色粘質土層面からその掘り込みが始まり、縄文時代前期に属するSK40土壙が第III層中位、または第IV層黄褐色粘土層上面より掘り込まれている。その他の土壙は第I・II層より掘り込まれている。以下、建物跡から順に遺構について説明する。

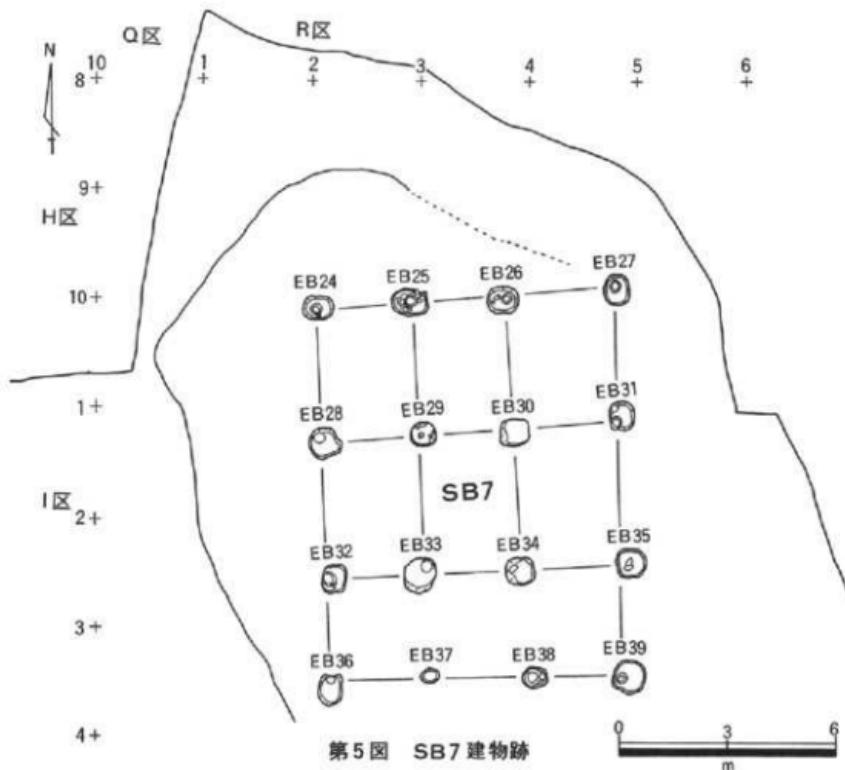
#### SB7建物跡（図版1・2の1～5）

北東精査区は、台地北西部から南東部へ緩やかな傾斜を示す。この傾斜部に東西12～15m、南北16～27mの範囲に黄褐色粘土を運び込み、敷き固めた整地地業が存在する。グリッドではR-H・I区10～5に当たり、さらに南部へ広がる様相を示している。この整地地業部には、上面から掘り込みが始まる柱穴があり、一定のまとまりを示したのでSB7建物跡と呼称した。東西（桁行）3間、南北（梁行）2間の東西棟で、南側に1間の庇部が付く掘立柱建物跡である。桁行全長840cm、梁行全長720cmを測る。柱穴の掘り方は径80～100cmの円形ないし、隅丸方形を呈し、柱痕は直径20～30cmの円形で、深さ40～60cmを測る。掘り方の埋め土は、黄褐色粘質土で炭化粒子を含む。柱の構成は北面桁行でEB24～27、南面桁行でEB32～35、西面梁行はEB24・28・32、東面梁行はEB27・31・35である。柱間距離は桁行で280cm（9尺）等間、梁行で360cm（12尺）等間を測る。庇部の柱はEB36～39で、梁間での柱間距離は300cm（10尺）を測る。梁間での全長は1,020cmとなる。

柱はすべて朽ちて残っていないが、柱痕が明確に識別できた（図版2の1～5）。掘り方内における柱痕の位置は隅に寄ったりしているものもあるなど一定しないが、桁行・梁行とも直線上に規則的に並んでいる。掘り方の埋め土は、粘性をもつ暗黄褐色土とサラサラした明褐色砂質土の互層で、柱の周囲が強く踏み固められている。

出土遺物はEB24柱穴底面より赤焼土器の穿穴のある脚部をもつ环形土器片が、底面に敷かれた状態で検出（図版2の2）。他には、建物内地業の上面より赤焼土器片が出土したが、すべて細片のため実測不可能であった。時期的には平安時代中頃と考えられる。

この建物跡の庇部東面に長さ300cm、幅35～50cmの溝状遺構が発見され、雨落ち溝とも考えられたが、掘り込み面がIV層上面であることや、覆土の状態が茶褐色粘質土で深さ80cmに至ることなどから、最終的に縄文時代のいわゆるTピットと判断した。本建物跡の南西750cmに検出されたSK44土壙も同様なTピットである。



第5図 SB7 建物跡

#### SB8建物跡（第4図・図版1・2の6）

南西精査区東半O・P-J区にも、北東精査区と同様な黄褐色粘土による整地地業箇所が発見された。整地地業の範囲は東西約15m×南北約11mであるが、さらにもう少し南側へ広がる様相を示している。地業の深さは中間部で約80cmに達する。南西精査区一帯は、松根の抜き取り痕が著しく遺構の検出は困難であったが、整地地業部北西端で辛じて柱穴を2ヶ所検出することができた（EB48・49）。柱穴は掘り方が長径80~90cmの不整の隅丸方形を呈し、東西方向に2個並んで発見された。柱痕は直径20~25cmの円形で、両者の距離が360cm（12尺）を測る。掘り方の埋め土は暗黄褐色粘質土と明褐色砂質土の互層である。他に柱穴は検出できなかったが、掘り方や整地地業の分布状況から、少くとも1棟の掘立柱建物跡を構成するものと思われる。

遺物は、整地地業を覆っている第II層暗褐色粘質土層中より花文字瓦や平瓦片が4点出土している（第7図・図版4）。また地業の盛土中からナイフ形石器やスクレイパー・フレイクなどが数点（第8図・図版4）出土している。

## 土 壤 (第6図・図版3)

### SK40土壤 (第6図・図版3)

RH区3—9グリッド第Ⅲ層上面で確認された、ほぼ円形を呈する土壤である。長径172cm、短径163cm、深さ8cmを測る。断面形はタライ状を呈し、ほぼ中央北寄りに縄文土器が押しつぶされた状態で検出された。覆土は褐色土で、黄褐色粘土粒子を多量に含み、粘性がある軟かい單一層である。底面はわずかに起伏し、壁面は緩やかな傾斜を呈している。土器は二個体で、器面全体に縄文が施されたものである。口縁部に籠状工具による波状の沈線が引かれたもの(第8図15)と、縄文だけのもの(第8図16・17)とがある。時期は縄文時代前期初頭(上川名Ⅱ式)である。

### SK43土壤 (第6図・図版3)

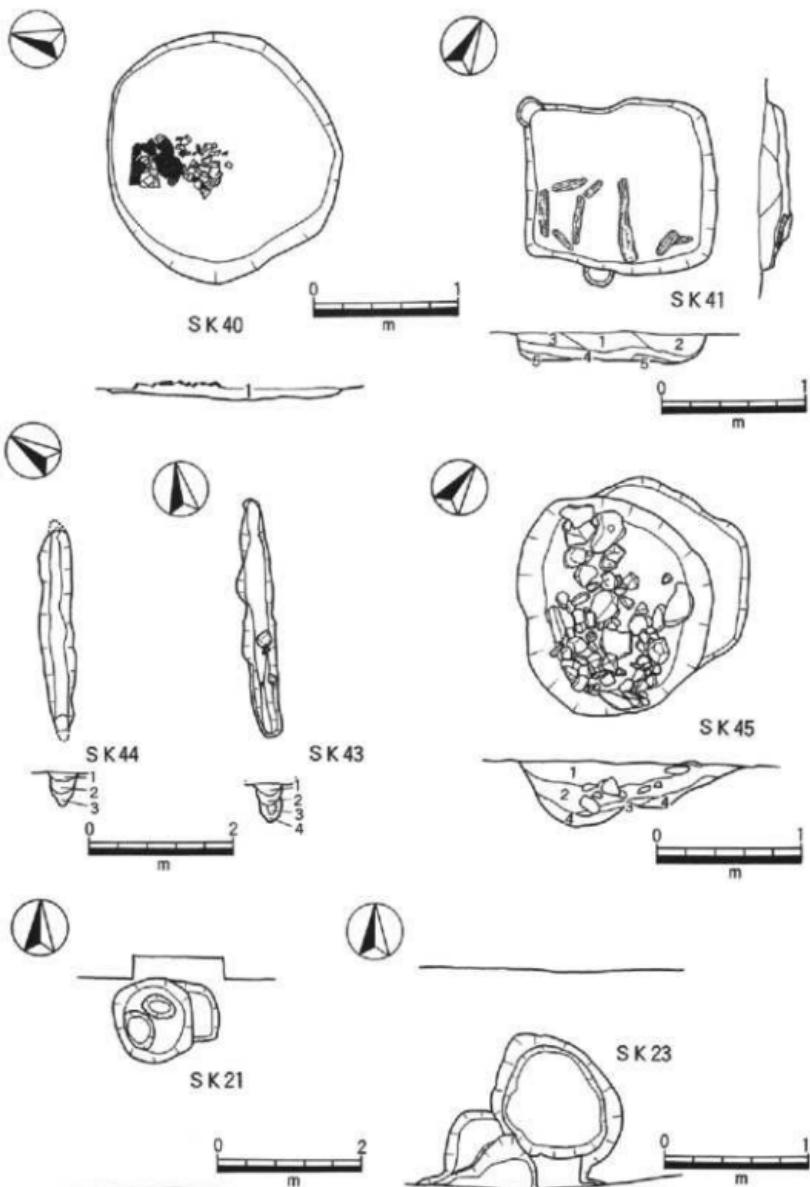
RI区5—3・4グリッド、SB6建物跡底部の東面下で発見された土壤である。確認面はⅣ層上面で、長さ324cm、幅38~50cm、深さ58cmを測る。壁面は凹凸があり、やや丸味をもつ。底面は舟底状を呈し、西端部はさらに外側に向って18cm程掘り込まれている。覆土は4層に分かれ、1層暗褐色土で炭化粒子や黄褐色粒子を含み硬い。2層は同様の暗褐色土で、1層に近似するが、黒褐色ブロックがみられるため分けた。3層は黒褐色土で炭化粒子を含み、軟らかい。4層は暗褐色土で、黄褐色粘土ブロックを多量に含む。遺物の出土はなかったが、いわゆるTピットとしての形態などから時期は縄文時代前期頃と考えられる。

### SK44土壤 (第6図・図版3)

QI区9—10—6・7グリッドⅣ層上面で確認された土壤である。長さ272cm、幅34~36cm、深さ44cmを測る。壁面は凹凸があり、底面は舟底状を呈している。土壤の両端部はさらに外側に向かって約19cm程掘り込まれている。覆土は3層に分かれ、1層は暗褐色土で、炭化粒子を含み硬い。2層は黒褐色土でブロック状に堆積しており硬い。3層も黒褐色土であるが、赤色粒子や黄褐色粘土ブロックを含み軟らかい。遺物の出土はなかったが、いわゆるTピットとしての形態などから時期は縄文時代前期頃と考えられる。

### SK41土壤 (第6図・図版3)

QI区8—6グリッドⅡ層下部より、その掘り込みが始まるほぼ長方形を呈した土壤である。土壤内面は焼成を受け、焼土が厚く堆積している。土壤南面と北西隅には径20cm、深さ7cmの浅いピットがある。長辺132cm、短辺110cm、深さ18cmを測る。土壤内には焼土を多く含み、炭化した木材が8本程残っていた。覆土は5層に分けられ、1層は褐色土で炭化粒子・微粒の黄褐色粘土を多量に含み硬い。2層は暗褐色土で、炭化粒子の微粒を多量に含み硬い。3層は褐色土で、炭化粒・焼土粒子を多量に含み軟らかい。4層は褐色土



第6図 土壌実測図

で、炭化粒子・焼土ブロックを多量に含み軟らかい。炭化材が多量に検出される。5層は褐色土で、黄褐色粘土ブロック・焼土粒子を含み軟らかい。

遺物は検出されなかったが、赤焼土器片と思われる赤色の粒子が3層中に含み、土器等を焼いた窓跡と考えられ、これに類似する土壤は第1次調査でも発見されている。時期は平安時代である。

#### SK45土壤（第6図・図版3）

R1区4・5・6・7グリッドで発見された円形を呈する土壤で、掘り込みが第II層上面から始まる。径160cm、深さ45cmを測り、土壤中位より段をなす、ややすり鉢状の土壤である。内部には人頭大の河原石が俵積状に検出された。また土壤の上面から須恵器片（第7図2）が1点発見された。覆土は4層に分かれ、1層は暗褐色土で、黄褐色ブロックを含み、わずかに炭化粒子を含み軟らかい。2層は褐色土で、炭化粒子を含み軟らかい。3層は黒褐色土で、炭化材を含み、土質がボソボソし軟らかい。4層は褐色土で黄褐色ブロックを多量に含み粘性があり軟らかい。IV層の漸移層と考えられる。伴出遺物は須恵器片だけであるが、掘り込み面や覆土の状態などから、終戦直後に畠地開墾の際、松根を抜いて石を埋めた跡と考えられる。他にもP・Q区でも同様な土壤（SK21～23）が発見されている。性格も同様である。

### 2. 遺物（第7・8図・図版4）

今回の調査で出土した遺物は、土師器、赤焼土器、須恵器、瓦、繩文土器などがある。遺跡全体が畠地開墾などによって掘り起こされているため、包含層内からの遺物の出土が僅かである。また遺構内からの出土も少ない。精査区では、南西部に遺物の出土が多い。

#### 赤焼土器（第7図1）

赤焼土器は総数64片の出土をみたが、すべて細片で、実測可能な土器は1点のみである。1は、SB7建物跡EB24の底面で検出されたものである。器形は環形土器と思われるが、底部に穿孔のある小さな脚が2～3個付くものと考えられる。小片であるが推定計測値は、環部の口径約16cm、底径4cm、器高6.4cm、脚部の高さ2cm、最大幅3cmを測る。外面にヘラ状工具によるナデ調整が施されている。このほかEB24から壺形土器、EB27・34から環形土器の細片が出土している。風化が著しく、調整技法等は不明である。

#### 土師器

SB6～EB24から、内面が黑色化処理されている壺形土器片が1点出土している。

#### 須恵器（第7図2）

SK45土壤の覆土1層より1点出土している。壺形土器の体部片と思われるもので、外面に条線状の叩き目、内面に同心円状のアテ痕がある。色調は灰白色で、焼成は硬い。

### 瓦（第7図3～6・図版4）

南西精査区O・P-J区第II層から4点出土している。第7図3は、花文字瓦である。推測による瓦当面の長さは、28～30cmと思われる。瓦当面の文様は一重の細隆起線によって囲まれた文様帶があり、右半部が欠損している。陰刻による四葉の複弁ないし3弁の花文を中心に「3」字状渦文が交互に施こされ、端部には複弁花文を半分描いたものを配列しているものと思われる。額部の基底部における幅が3.5cmである。額部には、太い2条の沈線による連続山形文が図に向って右から左へ引かれている。額部と平部は沈線で区画されている。城輪柵跡出土の第I類に類似する。表面には縄目の圧痕が付いている。

4～6は平瓦の破片である。表面には縄目の、裏面には布目ないし縄目の圧痕が付いている。平瓦の厚さは3.5cm～4.5cmで、焼成は良好である。第3・4・5次調査でも瓦片が出土している（第7図7～14）。

### 縄文土器（第8図15・16・17・図版4）

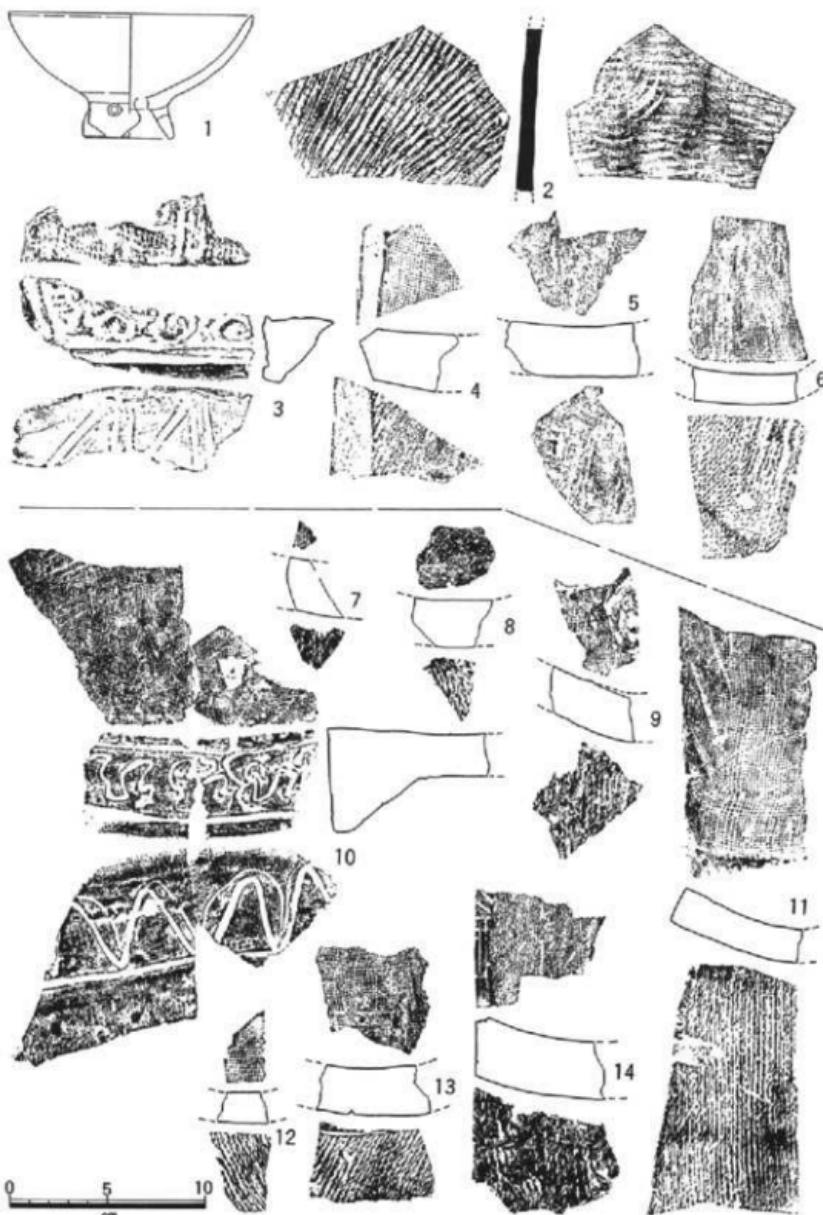
SK40土壤上部から2～3個体の縄文式土器が押しつぶされた状態で検出された。15は現存高18cm、口径約32.4cmの深鉢形土器で、胎土中に纖維と砂粒を混入し、積上げにより製作される土器である。器面全体に無節の結束をもつ羽状縄文が施こされ、口縁部には横位、胴部付近は斜位ないし、縦位に回転させている。口縁部にはヘラ状工具による三段の波状文を描き出しており、口縁は僅かに波状を呈している。焼成は軟らかい。16は現存高23.5cm、口径約23.2cmの深鉢形土器で、器面全体に単節のRLの縄文原体を横位に回転させている。口縁は平坦で、口唇部に同一原体による押圧縄文が施こされている。胎土中に纖維と砂粒を混入し、焼成は軟らかい。17は口縁部の破片で、施文方法は16と同じであるが口唇部に押圧縄文がない。胎土中に纖維と砂粒を多く含み、焼成はやや硬い。

時期は縄文時代前期初頭、東北南半でいう「上川名II式」頃に比定される。

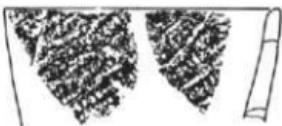
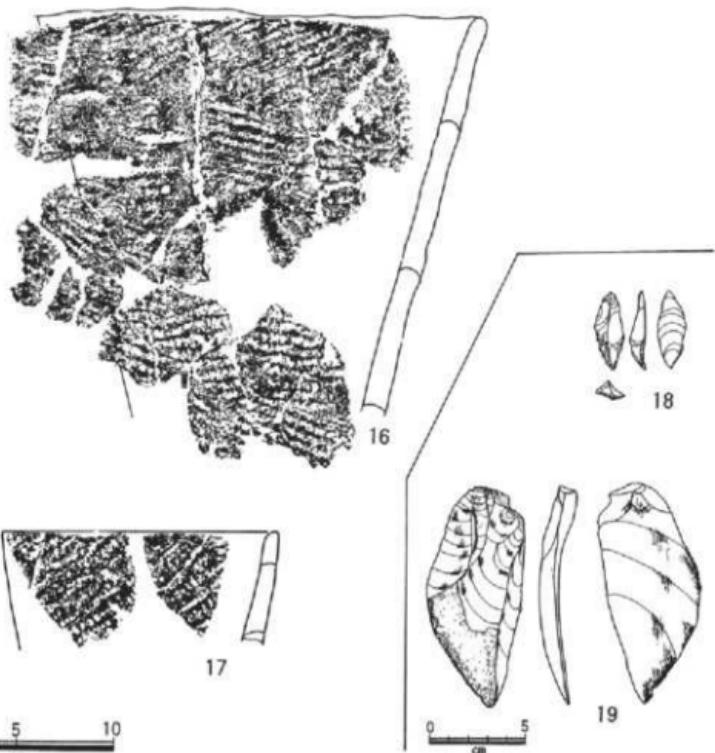
このほか南西精査区第II層から、縄文時代晩期末葉「大洞A'式」期にあたる浅鉢形土器片も1点出土している。

### 石器（第8図18・19・図版4）

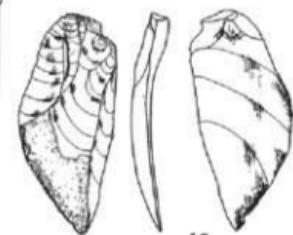
南西精査区の地業盛土中と、北東精査区Q I区1～9・10第IV層黄褐色粘土中から、旧石器時代に属するナイフ形石器、スクレーパー、フレイクなど、28点が出土している。石材には硬質頁岩、玉髓、黒耀石があるが、硬質頁岩が量的にもっとも多い。19は縦長剝片の刃部側辺に正面からの再調整を施したスクレーパーである。石材は硬質頁岩で、上端に打面とバルブが残っている。18は横断面が三角形を呈する小形のナイフ形石器で、基部に入念な片面調整を施している。石材は玉髓である。石器の量が少ないため内容が明らかでないが、切り出し形ナイフの存在などからみて、後期旧石器時代の遺物と考えられる。



第7図 出土遺物 (1)



0 5 10  
cm



0 5  
cm

第8図 出土遺物 (2)

## IV 結 語

昭和52年5月から6次にわたって実施された八森遺跡の発掘調査は、今回をもって一応の区切りとなる。第1次から第3次調査までは遺跡の確認調査、第4次から第6次調査までは緊急発掘調査としての性格をもつ。まだ第3次から第5次調査までの報告書は刊行されていないが、ここではこれまでの成果と問題点を述べて結語とする。

第1・2次調査は、昭和52年5月・7~8月に八幡町教育委員会が調査主体となって、八森遺跡の東半部を対象に実施したものである。調査担当者の佐藤禎宏氏によって、両次の発掘調査報告書がまとめられている（文献4）。

検出された遺構は建物跡5棟、溝跡9条、土壙2基、窯跡4基、性格不明の遺構2ヶ所である。SB1建物跡は、7間×3間の礎石をもった東西棟で、大きさは東西18.90m、南北9.67mである。この建物の北側と東側に雨落ち溝が発見されている。SB1の北13mの地点にSB2建物跡がある。これは7間×1間の掘立柱建物跡で、SB1に並行した東西棟である。大きさは東西約20.2m、南北約2.88~3.43mを測る。SB3建物跡はSB1の南54.5mにある。東西3間×南北2間の掘立八脚門で、大きさは東西約7.2m、南北約5.6mである。このSB1~3の3棟は南北に並び、その中軸線から東西に約45mの地点にSD7~9溝跡が検出されている。SD7溝跡の幅は55cm、SD8溝跡の幅は2.5mで、間に7.2mの余地をもって南北に並走している。重複関係等から23ある遺構の時期を4区分した上で、前述の遺構をⅢ期として同一時期と把えている。

さらに報告書は、平坦な丘陵をいっぱいに利用した90m方形の囲続施設を設置し、南に八脚門を構え、内部に正殿風の礎石建物跡、北方に後殿風の掘立柱建物跡を推測している。

第3・4次調査は、昭和54年8~12月に八幡町教育委員会が調査主体となって、八森遺跡の西端部を対象に実施したものである。報告書等は出ていないが、調査担当者の藤原岳良氏等によって、この地区の遺構・遺物の分布状況や、SB6建物跡を検出している。SB6は、SB1建物跡の西103.5mの地点にある。5間×3間の礎石をもつ東西棟で、向きをSB1建物跡とほぼ同じくする。大きさは東西約12.3m、南北約8.1mを測る。第4次調査ではこのほか、窯跡と考えられる落ち込み2基も検出されている。

第5次調査は、昭和55年5~8月に八幡町教育委員会が調査主体となって、八森遺跡の西半部を対象に実施したものである。正式な報告書は未刊であるが、調査担当者の藤原岳良氏によって、調査説明資料が出されている（文献10）。

検出された遺構は、建物跡1棟、溝跡1条、土壙1基、窯跡1基等である。なお、この地区は第6次調査で再調査しているので、詳細は第6次調査の項で述べる。

今次の調査（第6次調査）で検出された遺構は、建物跡2棟、土壙8基の計10例である。うちSB7建物跡、SK43・SK20・SK19としたものが、第5次調査の各遺構にあたる。SB7建物跡は、東西3間×南北2間の東西に長い掘立柱建物跡で、南側に底部が付く。SB7はSD9溝跡の西21.40mの地点にあたる。SB8建物跡は、柱穴が2個検出されただけであるが、周囲の整地層の分布等からして建物跡が存在したことはほぼ間違いないと思われる。柱穴間の芯心の長さが3.6mを測る。SB8はSD9溝跡の西102.4mの地点にあたる。SB7・8建物跡の南北方位は各々W-2°00'-N、W-1°40'-Nで、SB1建物跡の南北方位W-14°35'-Nに比較してみると、かなり真北方向に近い。

次に、これらの建物跡の時期について考えてみる。第1・2次調査で報告者はⅢ期とした建物跡を含む遺構群の時期を9世紀代と推定したが、同書で述べているように決定打を欠いている。11世紀以降と考えられるⅣ期の遺構群より古くなることは肯定し得ても、遺構でその時期を示すような遺物の出土はなかったからである（参考文献9）。また国分寺下層式頃とした土師器高环や9世紀代に一部遡る可能性があるとした土師器环D類（赤焼土器）の分析にも疑問が残る。さらに第3・4次調査で検出されたSB6礎石建物跡からも時期を示すような遺物の出土はない。

第6次調査で検出されたSB7建物跡は、時期を推定できる唯一の建物跡である。4例の柱穴の底面ないしその近くから赤焼土器が発見されており、その時期は10世紀後半から11世紀代頃に比定される。ただしSB7・8建物跡は、SB1・2・3・5建物跡に比較して建物軸線の方位が異っており、後者とは時期を別にする可能性も保留しておきたい。第1・2次調査で類例の少なかった須恵器环は、第5次調査のSK20土壙から底部の切り離しがヘラ切り手法によるものも含めてまとめて発見されており、八森遺跡に確実に9世紀代に遡る遺物があることも肯定された。方形の区画内の建物跡の時期決定は、なお今後に持ちこされた課題といえよう。

ところで第1・2次調査で検出された90m四方と考えられる区画内の建物の配置は、佐藤禎宏氏が度々指摘されているように、南門・正殿・後殿と考えるのが妥当である（参考文献3・4・7）。正殿跡と考えられるSB1建物跡の前面には同建物に直交する道路側溝とも考えられる溝があるし、東西に脇殿を築く余裕もある。第3～6次調査で検出された西側の3棟の建物跡も含め、国府移転跡の可能性をも秘めた重要な官衙であることは疑いない。

佐藤禎宏氏が八森遺跡についてさらに論を進めた、「日本三大実録」光孝天皇仁和三（887）年五月廿日条に出てくる「旧府近側高敞之地」が八森遺跡であるという説は、その多角的な見地の論の展開とともに、大いに傾聴すべきである（参考文献7）が、ここで詳しく紹

介する余裕はない。ただこれに關し第6次調査の内容をもとに一・二付記しておきたい。

一つは八森遺跡西半部SB8建物跡周辺から出土した瓦についてである。本遺跡から出土した瓦の点数は第3・4次調査で25片、第5次調査で2片、第6次調査で4片の計31点に達する。ほとんどが布目瓦であるが、花文字瓦および第3・4次調査で発見された文様系統の不明な字瓦（第7図10）が各1点づつある。花文字瓦は、酒田市城輪柵跡で報告された花文字瓦第一類（参考文献5）に比定できるものである。城輪柵跡では3期の時期区分のうちⅡ期の遺構、とくに雨落溝の埋土に瓦を含んでいる。軒丸瓦をも含めて瓦の時期は10世紀後半頃と把握されている（参考文献5・11）が、土器の出土量が少ない中で日本海沿岸を含めた瓦の再吟味が必要と思われる。

もう一つは礎石建物の出現についてである。城輪柵跡ではⅠ・Ⅱ期の建物はすべて掘立柱建物跡で、礎石建物を用いるのは11世紀以降と考えられるⅢ期からである。八森遺跡を仁和3年条の「旧府近側高敞之地」と想定して、平安時代の出羽国府と考えられる城輪柵跡のⅠ期とⅡ期の間にに入るには建物の構造面からも、なお不自然さが残る。

このほか土器を焼いた窯跡と推定される9基の焼土や炭化物を伴なう落ち込みの吟味、さらには西半区の性格付けなど残された問題は多い。

最後に、これまで多くの困難な状況下にあって、八森遺跡の保存のために御尽力なされた八幡町当局並びに関係者各位に心から感謝するとともに、今後の史跡整備等の対策を期待して結びとしたい。

## 文 献

1. 平川 南 「出羽国府論」 研究紀要IV 多賀城跡調査研究所 1977
2. 阿部義平 「古代出羽国の発掘調査」 堂の前遺跡とその周辺 日本歴史文化財レポート 1978
3. 佐藤禎宏 「平安時代の出羽の国府」 城輪柵跡と八森遺跡の調査から 山形教育第198号 1978
4. 佐藤禎宏 「八森遺跡」 第1次・第2次発掘調査報告 八幡町教育委員会 1978
5. 小野 忍 「城輪柵遺跡の性格論をめぐって」 酒田市教育研究所第30号 1978
6. 平川 南 「古代東北城柵の特質について」 研究紀要第4巻 東北歴史資料館 1978
7. 佐藤禎宏 「八森遺跡と出羽国府」 山形県地域史研究・会報第5号 1980
8. 川崎利夫 「城輪柵周辺の諸遺跡」 最近の発掘調査から 羽陽文化第112号 山形県文化財保護協会 1980
9. 佐藤庄一 「山形県における平安時代の土器様相（予察）」 庄内考古学第16号 1979
10. 藤原岳良 「八森遺跡第5次調査説明資料」 八幡町教育委員会 1980
11. 柏倉亮吉・伊藤 忍 「平野山古窯跡群」 寒河江市教育委員会 1970

# 図 版

図版 1



遺跡遠景（南西より）

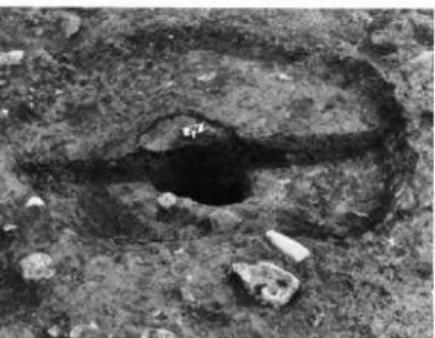


南西区近景（東より）



北東区SB7建物跡  
(南より)

図版 2 SB7建物跡柱穴



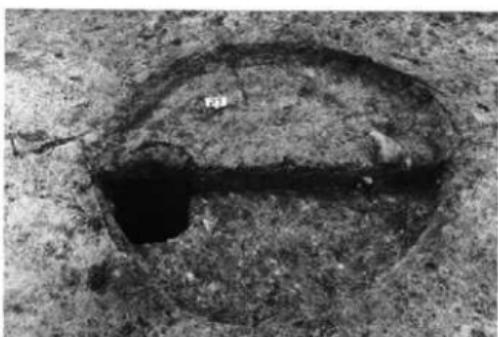
1. EB24柱穴



2. EB24柱穴内土器出土状態



3. EB25柱穴



4. EB27柱穴

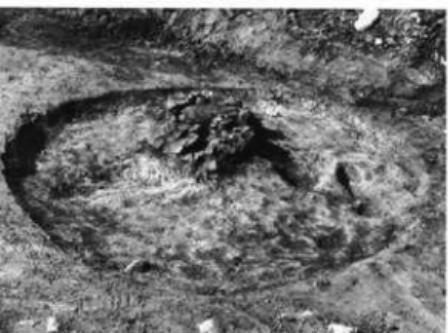


5. EB31柱穴



6. SB8建物跡・EB48柱穴

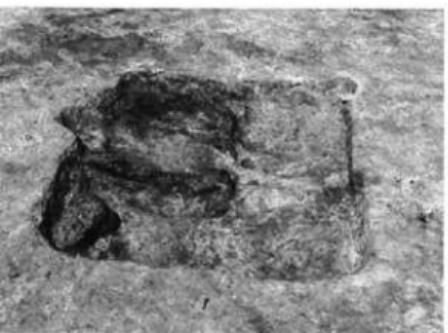
図版 3 SK40・41・43・44・45号土壤



SK40土壤



SK40土壤内土器出土状態



SK41土壤



SK43土壤

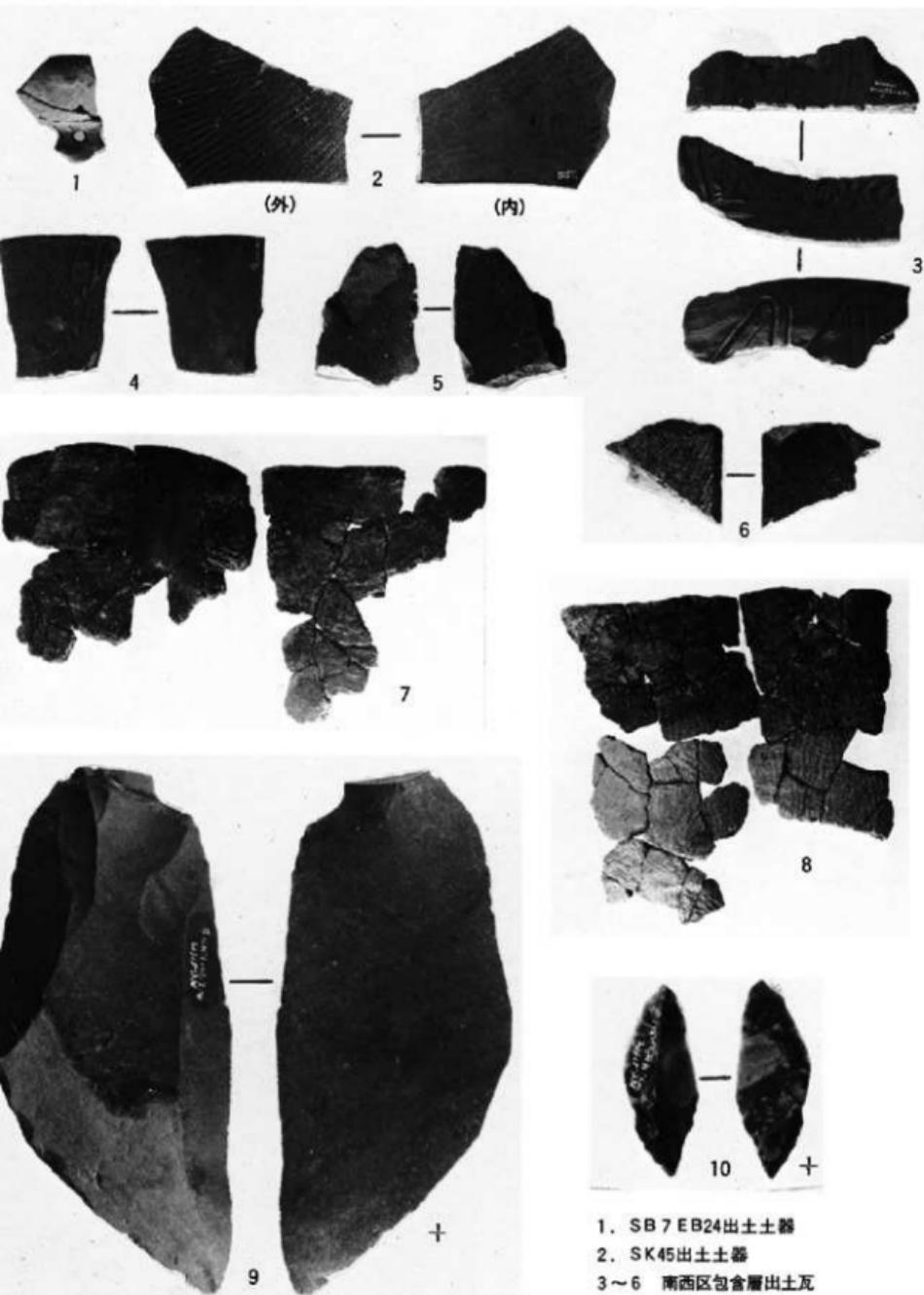


SK44土壤



SK45土壤

図版 4 出土遺物



1. SB 7 EB24出土土器  
2. SK45出土土器  
3~6 南西区包含層出土瓦  
7・8 SK40出土土器  
9・10 整地地表土内出土石器

---

山形県埋蔵文化財調査報告書 第54集

はち もり  
八 森 遺 跡

第6次発掘調査報告書

昭和57年3月23日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 山形県  
山形県教育委員会

印刷 鶴岡印刷株式会社  
鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080

---